

研究ノート 『高麗大藏經』

金光哲

序章 海印寺大藏經版の「発見」と 泉涌寺への「奉献」

(1) 関野貞の大藏經版の「発見」

明治三十五年（一九〇二）、東京帝国大学工科大学助教授・関野貞は、林駐韓公使、萩原書記官、塩川通訳官、大鳥外交官補、三増京城領事、加藤仁川領事、幣原釜山領事らの「庇護」のもと、朝鮮建築と古美術の調査を行なった。この調査中、慶尚南道陝川郡伽倻山海印寺において、大藏經の版木を「発見」した。この海印寺と慶州仏国寺の調査は、幣原釜山領事の「便宜」のもとで行なわれたものであった。

関野は、二年後の『韓国建築調査報告』⁽¹⁾第四編、第七章、四、「海印寺」で、「修多羅藏及法宝殿」を、「高麗大藏經ヲ藏スル經藏ナリ」とするとともに、大藏經版を収納する「修多羅藏」の内部写真を公表した。つづいて、明治四十年（一九〇七）六月、雑誌『宗教界』第三卷、第六号に、口絵解説「海印寺大藏經板に就て」を発表し、そのなかで、海印寺大藏經版が「高

麗時代の者となすの妥当」を主張した。そして、「我芝増上寺にある高麗板大藏經は、或は此經板を印せし」ものではないかとし、

世の学者、往々韓国に於て、高麗經板の既に全く湮滅せしことを曰ふ者あるは誤りにして、……

と、高麗經板の「発見」をおおいにアピールした。

この関野の発言の背景には、次のような事情があった。徳川家の菩提所であった三縁山増上寺の高麗大藏經は、慶長十四年（一六〇九）三月十四日の徳川家康の寄進によるものである。増上寺の僧・隨天は、延享五年（一七四八）に『縁山三大藏經縁起』⁽²⁾を編み、

本邦現在藏本、無_レ善_ニ於此版_ニ、無_レ古_ニ於此版_ニ。高麗喪乱、此版亦委_ニ煨燼_ニ矣。

と記した。これは、増上寺藏大藏經は、高麗喪乱のなかから焼け残ったものと考えており、また、「無善於此版」といっていることから、朝鮮での大藏經の存在を疑問視したものであった。

明治十三～八年（一八八〇～五）間に出版された弘教書院編『大日本校訂 縮刷大藏經』は、

(1)『韓国建築調査報告』、『東京帝国大学工科大学学術報告』第六号、明治三十七年七月

(2)小川敬吉「故関野先生の思出」、『関野先生を弔ふ』、『建築雑誌』第四十九輯、第六〇五号、昭和十年十一月、建築学会

(3)前掲書「韓国建築調査報告」

(4)『三縁山志』、『浄土宗全書』第十九卷、山喜房仏書林

(5)大正新脩大藏經別巻『昭和法宝総目録』第二卷、大正新脩大藏經刊行会

序文に、

彼板亦久亡。今則其經亦無_レ存云。我邦之麗藏可_レ謂_二天下至宝_一也。

とあって、原版そのものの存在を否定した。

このように、日本では大藏經版木の存在が否定視されていた。しかし、関野の発見発表は大きな反響をよび、明治四十二年（一九〇九）には、小野玄妙「朝鮮伽耶山海印寺大藏經板」⁽⁶⁾、一九一〇年に入って、小野玄妙「韓国海印寺の大藏經に就て」⁽⁷⁾、「高麗祐世僧統義天の大藏經雕造の事蹟」⁽⁸⁾、妻木直良「高麗大藏經雕板年代に就て」⁽⁹⁾、「再び高麗大藏經に就て」⁽¹⁰⁾、村上龍佑「大藏經版雕造年代考」⁽¹¹⁾、浅見倫太郎「高麗板大藏經雕造年時考」⁽¹²⁾とつづき、以降、大正末年まで論稿発表が継続した。

この過程で、もっとも注目された文献が二つあった。一つは、李奎報（相国）の著『東国李相国全集』所収の『大藏刻板君臣祈告文』であった。この文献を最初に引用紹介した論文は、朝鮮在住の村上龍佑「大藏經版雕造年代考」と、妻木直良「高麗大藏經雕板年代に就て」であった。妻木使用の『東国李相国全集』は、論文に明らかなように、明治四十二年、京都大学教授・内藤湖南が、加賀藩藩主前田家の蔵書を調査中、十八冊の全集を発見したものであった。前田家がどうしてこの全集を入手したかは不明である。

さて、もう一つの文献は、文宗の第四子・義天（大覚国師）の著『大覚国師文集』で、これは海印寺蔵（木板）のものである。「内集」

二十三卷は義天自身の詩文、「外集」十三卷は、義天に關係する諸家の詩文・書簡・碑銘を集めたものであるが、缺板が多く、妻木直良の「三たび高麗大藏經雕造を論ず」⁽¹²⁾では、「落丁が非常に多い。殆んど全き巻といふのは、三十餘卷の中に二・三卷」といっている。

『大覚国師文集』は、村上龍佑と浅見倫太郎の論文に引用されて、その存在が知られるようになった。妻木は、浅見の論文でこの存在を知り、浅見に「謄写若しくは印成」を希望したが実現できず、「関野博士を訪ふて、請來の『大覚文集』内集と外集とを併せ得」た。妻木はまた、「東大寺に於ける高麗古版經に就て」⁽¹³⁾で、「大覚国師内外集を恵まれたる関野博士、及び谷井学士の好意を感謝す」といっている。ここでは「恵まれたる」といっており、「併せ得」たとする表現とを考え併せて、妻木は「印成」を「譲渡」された可能性が大きい。推測に間違いがなければ、関野と谷井の二人分を含め、海印寺から三部の『大覚国師文集』が搬出されたことになる。関野はなぜか、口絵解説「海印寺大藏經板に就て」に、この文献を引用していない。ちなみに、関野は、明治四十一年（一九〇八）四月、工学博士になっている。

池内宏の大正十二～三年（一九二三～四）の論稿「高麗朝の大藏經」⁽¹⁴⁾は、この『大覚国師文集』を縦横に駆使している。池内は、「新たに発見せられた涅槃經の疏」⁽¹⁵⁾において、『大覚国師文集』入手の経過について、次のようにいっ

(6) 『宗教界』第五卷、第十二号、明治四十二年十二月

(7) 『東洋哲学』第十七編、第三号、明治四十三年三月

(8) 『東洋哲学』第十七編、第十二号、明治四十三年十二月

(9) 『新仏教』第十一卷、第五～六号、明治四十三年五～六月

(10) 『海印寺大藏經版調査報告書』『明治四十三年五月、龍谷大学図書館蔵』

(11) 『朝鮮』第二十八～九号、明治四十三年六～七月

(12) 『新仏教』第十二卷、第四～五号、明治四十四年三～四月

(13) 『考古学雑誌』第一卷、第八号、考古学会、明治四十四年四月

(14) 『東洋学報』第十三卷、第三号、大正十二年九月。第十四卷、第一号、大正十三年三月、東洋協会學術調査部。『滿鮮史研究』中世第二冊、吉川弘文館

(15) 『東洋学報』第十二卷、第四号、大正十一年十二月（複製『東洋学報』第十二卷、財団法人 東洋文庫、

ている。

余は今年の夏、義天の事歴を詳かに知ろうとして、大覚国師文集及び同外集を閲読する必要に迫られた。然かも、内地に於ける本書の所蔵者が極めて少なく、而して、いろ／＼の事情から、それを借覧することが頗る面倒に感ぜられた。

と、したうえで、

因って、書面を以て、朝鮮総督府中樞院書記官長小田幹治郎氏にはかったところ、特別な厚意を以て、直ちに加^(マ)佛山海印寺の刻板から、新たに印出せしめた一本を寄せられたので、余は研究上多大の便宜と利益とを蒙った。……

といっている。池内が入手したのは、新しく印刷させたものであった。「今年の夏」とは、大正十一年の夏のことである。

(2) 寺内正毅の泉涌寺への「奉献」

明治の日本が、朝鮮侵略のためにとった政策の一つが、朝鮮の政務を日本人官僚が直接掌握することであった。明治二十七年（一八九四）十月二十五日⁽¹⁶⁾、朝鮮に着いた井上馨公使は、二十八日朝鮮国王高宗と謁見し、「屢々内謁見ヲ請ヒ、何事ニ依ラズ、貴国ノ為メ言ヲ進ムル事アル」べき「一ノ顧問官」、つまり、いつでも謁見できる「最高顧問」を約束させた。

井上は十一月二十日⁽¹⁷⁾、日本人顧問官の導入をふくむ十九項目の内政改革を強要、結果、朝鮮政府各部門での日本人顧問官は、十二月から翌年一月までの短期間に四十余名⁽¹⁸⁾に達した。

かくして、日本人顧問官と事務官による実質的な政務掌握によって、日本の一元的な統治指揮系統が、朝鮮政府のなかで確立されていった。

一八九七年十月、朝鮮が大韓帝国（韓国）になり、高宗が皇帝となっても、日本の官僚の実質的な政務遂行には、なんらの変化もなかった。明治四十三年（一九一〇年）四月、大韓帝国宮内府事務官・村上龍佑は、全羅南道茂朱郡赤裳山城の史跡調査中、海印寺大藏經版の調査を命じられた。村上は、五月十二日、十項目の『海印寺大藏經版調査報告書』⁽¹⁹⁾（以下、『調査報告書』）を提出した。相手は、宮内府大臣・関丙奭と、次官・小宮三保松であった。この年の八月二十二日、「日韓併合」条約が調印され、二十九日には「朝鮮総督府」が設置された。「朝鮮人は、わが法規に服従するか、死か、その何れかを選ばねばならぬ」と、発言した初代総督・寺内正毅は、大正四年（一九一五）に高麗大藏經を摺写し、「皇室ノ御寺ナル泉涌寺ニ奉献」した。京都東山にある泉涌寺は、鎌倉時代の仁治三年（一二四一）、境内に四条天皇陵が造営されて以降、皇室の香華所（菩提寺）として、「御寺」と通称された。

『高麗板大藏經印刷顛末』⁽²⁰⁾の「大藏經奉献始末」によれば、大正三年秋八月、寺内正毅は大藏經の調査を秋山参事官に命じ、十月九日、参事官室勤務小田幹治郎事務官を主任とする調査団を海印寺に派遣した。この小田幹治郎こそは、池内宏の文に登場した同じ人物であった。翌年の三月十五日より印刷を開始、六月二日に三部の大藏經の印刷を完了、八月下旬に製本を

→昭和四十三年四月）

(16)外務省編纂『日本外交文書』第二十七巻、第二冊、四六九「謁見始末報告ノ件」、日本国際連合協会、昭和二十八年

(17)前掲書『日本外交文書』、四八二「謁見ノ模様報告ノ件」一・二

(18)森山茂徳著『日韓併合』五十六頁、吉川弘文館

(19)前掲書『海印寺大藏經版調査報告書』

(20)森田慈航編『高麗板大藏經印刷顛末』、大正十二年、京都大学付属図書館蔵。（「大藏經奉献顛末」、『朝鮮彙報』、大正五年四月一日）

終った。

寺内は、印刷中の三月二十一日に海印寺に入り、「仔細ニ経閣及印刷工場ヲ巡視」し、大藏經の「泉涌寺奉獻」の「意思愈々定」まった。十月下旬、「大藏經ノ一部、大般涅槃經四帙四十卷ヲ桐匣ニ蔵」め、大正天皇の「即位御大礼參列ノ為メ上京」し、十月三十日、「宮内大臣ヲ經」て、「高麗大藏經板ノ由来書」を添えた「上奏案」を「闕下ニ奉呈」した。

この「上奏案」のなかで、寺内は、

先帝ノ朝鮮統治權ヲ収メ給ヘルハ、廢ヲ興シ絶ヲ繼キ疲憊^{ひはい}ノ黎庶^{かいしよ}ヲ愛撫蘇活シ給ハムトスルノ聖旨ニ出ツ。今七百年空シク晦藏セラレタル此ノ至宝ノ、再ヒ光明ヲ放チタルモノ亦、朝鮮ノ都鄙ニ遍照セル皇化ノ餘光ニ外ナラス。

と、朝鮮統治は、「疲憊ノ黎庶」である朝鮮人民を、「愛撫蘇活」すべき明治天皇の「聖旨」によるものとし、「今七百年空シク晦藏セラレタル」大藏經の「発見」は、「皇化ノ餘光」によるものだとし、印刷した三部のうち、「一本ニハ、特殊ノ装綴ヲ施シ、之ヲ京都東山泉涌寺ニ納」めることは、明治天皇の「鴻業ノ一端ヲ記念」するものであるとした。この寺内の上奏に対し、「陛下ハ、イト御満足ニ思召サレシ趣ニテ即日」、「泉涌寺ニ寄納」の許可がおりた。結果、寺内が持参した大般涅槃經以外の残り的大藏經は、十一月廿五日にソウルを発程し、十二月二日京都到着、四日泉涌寺はこれを「受領」した。

昭和十年四月、「満州国」康德皇帝が、「宗主国元首に対する礼を致さんが為」に訪日した。そのおり、宮内省図書寮と帝室博物館は、所蔵の海印寺板大藏經と黄蘗板大藏經を「供覧」し

た。「満州国」康德皇帝は、帰国後、朝鮮総督と宮内省のそれぞれに入手希望を申しでた。

朝鮮総督は、これにもとづいて、海印寺大藏經板の印刷に要する予算書提出とその印刷を、京城帝国大学教授・高橋亨に委嘱した。高橋は、「本事業は、満鮮の仏縁を締結し、併せて朝鮮古代文化を満州に紹介する重要意義を有するものと考」え、引き受けた。昭和十二年五月準備着手、九月一日より印刷開始、十二月製本および経函作製が完了した。翌年一月、南・朝鮮総督の検分を受け、「満州国」皇帝に「言上書」を添えて「捧呈」した。

高橋は、泉涌寺奉納の大藏經は「官庁の手」によって印刷されたものであるが、「満州国」皇帝に捧呈の大藏經は、「個人の微力を以」て竣工したもので、「其顛末を記録に留めて、後に遺す」ため、論文「高麗大藏經板印出顛末」⁽²¹⁾を発表した、という。発表は、戦後六年も経過した昭和二十六年十月であった。

さて、村上龍佑の『調査報告書』、「大藏經版ニ対スル意見」のなかに、

又、光武三年（一八九九）、皇室ヨリ藏經印刷ヲ命シタルトキハ、角牌及封山禁松牌ヲ下付シタルコトアルモ、……。

とする記述があり、高宗皇帝は、閔野の一九〇二年の「発見」よりも以前、一八九九年に大藏經の印刷を命じている。この事実によって、閔野の「発見」が、実は、日本人にとっての「発見」であったことがわかる。

第一章 大藏經の朝鮮への請来

(1) 書写版大藏經（一切經）の請来

インドで誕生した仏教は、北インドからガン

(21)『朝鮮学報』第二輯、朝鮮学会、昭和二十六年十月

ダーラを経て中央アジア・中国に伝わり、さらに朝鮮・日本・台湾・ヴェトナムに伝播した。中央アジアルートの衰退後は、カシミールやネパールを経て、チベット・蒙古・満州に伝わっていった。これらの地方に伝わった仏教を、北方仏教（北伝仏教）という。一方、東南アジアのスリランカ（セイロン）・ビルマ・タイ・カンボジア・ラオスに伝播した仏教を、南方仏教（南伝仏教）という。

仏教の典籍を経藏・律藏・論藏に分類し、これを総称して三藏というが、北方仏教の典籍は、古代インドのサンスクリット語（梵語）を基本にしており、中国では、二世紀中頃から八世紀頃にかけて、漢文に翻訳された。この三藏に中国成立の注釈書をふくめ、一切經とか、大藏經とか、単に藏經と称するようになった。ただ、漢訳大藏經という場合、広義には、朝鮮や日本の仏教者の著述をふくめている場合がある。常磐大定氏の「大藏經雕印考」⁽²²⁾によれば、三藏の語は、梁の五二〇年頃の文献に見え、隋から唐の時代に多用されている。大藏の語は、五代十国の後晋（九三一～四〇）の可洪『音義』序に見え、五代以後に流布し、宋の時代になって大藏目録とか、一大藏經というように使われている。一方、一切經の語は、唐の菩提流支訳（七一三年）の『大宝積經』に見える。

インド仏教後期の經典は、チベット大藏經にしか残らないものが多く、チベット大藏經は仏教研究の貴重な宝庫とされる。また、チベット訳は、サンスクリット經典をかなり忠実に直訳されているため、サンスクリット原典への復元がかなり容易であるという。ほかに、漢訳大藏經とチベット大藏經から重訳した蒙古大藏經や満州大藏經がある。ちなみに、南方仏教はパー

リ語經典を基本にし、「パーリ語三藏」は紀元前に成立したもっとも古い大藏經で、日本では、『南伝大藏經』（六十五巻・七十冊）として完訳されている。

さて、大藏經の朝鮮への請来については、池内宏氏の「高麗朝の大藏經」において、すでに詳細に論じられている。大藏經が初めて朝鮮の地に請来されたことが確認できる初見記事は、『三国遺事』⁽²³⁾巻三、前後所將舍利の、

貞觀十七年、慈藏法師載三藏四百餘函來。安于通度寺。

とする記事で、新羅第二十七代善徳王の時代である。慈藏法師は、『三国遺事』巻四、慈藏定律に、

仁平三年丙申歲受勅、與門人僧実等十餘輩西入唐。……貞觀十七年癸卯。本国善徳王上表乞還。詔、許引入宮。……以本朝經像未充、乞齎藏經一部。

とあるように、仁平三年（六三六）入唐し、貞觀十七年（六四三）、請来の藏經一部、四百餘函を通度寺に納めている。

ところで同じ、前後所將舎利の条に、

羅末、普耀禪師再至吳越。載大藏經來。

とあり、新羅末期、普耀禪師が吳越より大藏經を請来している。また、『高麗史』⁽²⁴⁾巻一、太祖十一年（九二八）八月条に、

新羅僧洪慶自唐閩府航。載大藏經一部。至礼成江、王親迎之。置于帝釈院。

とあって、新羅最末期、新羅僧洪慶が建国もない高麗に大藏經をもたらしており、帝釈院に納められたという。このとき、高麗を建国した王建みずから礼成江にでかけ、洪慶を出迎え

(22)常磐大定「大藏經雕印考」、『哲学雑誌』第三百十三号、大正二年三月

(23)朝鮮史学会編『三国遺事』、国書刊行会

(24)国書刊行会編『高麗史』、国書刊行会

ている。

北宋より彩色紙墨の「金文一藏」を請来している。『高麗史』巻四、顯宗十年（一〇一九）八月己丑条に、

遣_レ 礼賓卿崔元信・李守和_一。如_レ 宋賀_レ 正。

とする崔元信・李守和の北宋派遣記事がある。この崔元信については、『高麗国靈鷲山大慈恩玄化寺碑陰記』⁽²⁵⁾（以下、『玄化寺碑陰記』）に、

又於_レ 去庚申歲内_一。……以_レ 昨令_レ 差_レ 使。將_レ 紙墨價資_一 去入_レ 中華_一。奏_レ 告事由_一。欲_レ 求_レ 大藏經_一。特蒙_レ 許送_レ 金文一藏_一。却不_レ 收_下 納所_一 將去_レ 價資物色_上。仍蒙_レ 宣、送_レ 彩色有二千餘兩_一。

とする記事がある。「庚申歲」とは一〇二〇年のことで、「以_レ 昨」は前年の顯宗十年（一〇一九）にあたり、「令_レ 差_レ 使」とは、崔元信と李守和の北宋派遣に該当する。北宋側は受け取らなかったが、このとき高麗は、彩色紙墨の代価「二千餘兩」を献じ、彩色紙墨の「金文一藏」を受け取った。「玄化寺」は高麗の都・開京（開城）にあり、「金文一藏」は、この玄化寺に納めるべく請来したものである。『高麗史』巻四、顯宗十三年（一〇二二）五月丙子条に、

韓祚還_レ 自_レ 宋、帝賜_レ 聖惠方陰陽二宅書乾興曆積典一藏_一。

とある記事は、顯宗十二年六月丁卯条に、

遣_レ 韓祚_一 如_レ 宗謝恩。

とあって、この謝恩は「金文一藏」に対する謝恩であり、池内氏が指摘するように、「韓祚が更に一藏を乞ひ得て還れりといふは、……頗る不自然」とみるのが正しい。したがって、「積典一藏」は『高麗史』の間違いだろう。

(2) 二つの北宋版と契丹本の請来

大藏經が木版印刷された最初は、北宋の時代である。北宋の太祖は、開宝四年（九七一）、大藏經木刻の勅命をくだし、次の太宗時代の太平興国八年（九八三）、十三年の歲月かけて完了した。これを「北宋版」といい、勅命の年号をとって「開宝版」とか、蜀の成都で実行されたので「蜀板」ともいう。

北宋版の高麗請来については、『高麗史』巻三、成宗十年（九九一）夏四月庚寅条に、

韓彦恭還_レ 自_レ 宋。献_レ 大藏經_一。王迎_レ 入内殿_一、邀_レ 僧開讀。

とあり、卷九十三の韓彦恭伝にも、

彦恭奏請_レ 大藏經_一。帝賜_レ 藏經四百八十一函、凡二千五百卷_一。

とあって、成宗十年に韓彦恭が、「藏經四百八十一函、凡二千五百卷」を請来している。

ところで、『宋史』巻四八七、高麗伝に、

端拱二年、遣_レ 使來貢。……先_レ 是治遣_レ 僧如可_一 齎_レ 表來觀。請_レ 大藏經_一。至_レ 是賜_レ 之。仍、賜_レ 如可紫衣_一、令_レ 同歸_レ 本国_一。

とある「治」は成宗の諱であるが、成宗が端二年（九八九）以前、僧如可を北宋に派遣し、大藏經を求めたとある。ただし、『高麗史』にはこの記事がない。この韓彦恭と僧如可に関する記事について、池内氏は、「中一年を隔てゝ同じ請求と賜與」することを疑問視し、二人が「同時か、若くは相前後して宋」に入り、「共に帰国」したものと推測している。しかし、僧如可の大藏經請求は、中国側の史料から事実として、先に派遣した僧如可は、なんらかの理由によって帰国できず、改めて韓彦恭を派遣したとする方が、自然ではないだろうか。

(25)朝鮮総督府『朝鮮金石総覧』七三、国書刊行会

次に、『高麗史』卷九、文宗三十七年（一〇八四）三月己丑条に、

命_二太子_一迎_二宋朝大藏經_一。置_二于開国寺_一、仍設_二道場_一。

とする「宋朝大藏經」請来の記事がある。これについては、延久四年（一〇七一）に入宋の延曆寺総持院阿闍梨・成尋撰『参天台五台山記』⁽²⁶⁾第七、熙寧六年（一〇七三）三月廿三日条に、

伏観、聖朝新訳経五百餘卷未_レ伝_二日本_一。

……成尋今来欲_レ乞_レ賜_二上件新訳経_一。

とあり、三月廿四日条に、

今来所_レ要新訳経五百餘卷。……每一歳并新訳・成訳共、五千四百二十五卷。

とあって、新訳「五百餘卷」を含めた大藏經を得ている。しかし、成尋は客死している。文宗三十七年（一〇八三）は、成尋入宋の延久四年より十二年後であることから、この「宋朝大藏經」が、「新訳経五百餘卷」をふくめた大藏經ということになる。つまり、高麗は「北宋版」と増補の「宋朝大藏經」を入手したことになる。

契丹からも大藏經が請来された。『高麗史』卷八、文宗十七年（一〇六三）三月丙午条に、

契丹送_二大藏經_一。王備_二法駕_一迎_二于西郊_一。

とある。『遼史』卷一一五、高麗伝に、

清寧八年来貢。十二月以_二仏經一藏_一賜_レ徽。

とある「徽」とは文宗の諱のことで、契丹族が清寧八年（一〇六二）に建国した「遼」に高麗より使者をたて、契丹本大藏經を入手した。この契丹本は、現在断片すら伝わっていない。

第二章 高麗大藏經の刻板

(1) 初彫大藏經

新羅の末期、八九二年に甄萱^{ギョソフソ}が後百済をおこし、九〇一年には、弓裔^{クンニ}が泰封（後高句麗）をおこした。その泰封の一部将であった王建^{ワンゴン}は、九一八年に弓裔を倒し、高麗王朝を創建。開京（開城）を都に定めた。つづいて、九二六年渤海が滅亡し、九三五年に新羅が降伏した。翌年、後百済を滅ぼして、ここに朝鮮ではじめての統一王朝が樹立された。高麗太祖（王建）は、建国初期に新羅からの大藏經受け入れに見られるように、仏教を保護した。建国の翌年三月には、「法王・王輪等十寺」を創建した。太祖の「訓要十条」⁽²⁷⁾は後世の捏造⁽²⁸⁾とされるが、その「其一日」に、

我国家大業必資_二諸仏護衛之力_一。故、創_二禪教寺院_一、差_二遣住持_一、焚修、使_二各治_一其業_一。

とある項目が、太祖の仏教に対する基本的立場を、よく示すものであることは確かである。

第八代顯宗（一〇一〇～三一）の時代に、大藏經板の彫刻を示す資料がある。

① 大覚国師・義天（一〇五五～一一〇一）の『諸宗教蔵彫印疏』（『大覚国師文集』第十五卷）に、

竊念、国家自_二從元聖_一、迄_二至眇躬_一、敦_二衆善_一、以保_レ邦、頼_二至仁_一而育_レ物。顯宗則彫_二五千軸之秘藏_一、文考乃鏤_二千万頌之契經_一。正文雖_レ布_二於迹遐_一、章疏或幾_二乎墮失_一。（以下、缺）

とあって、顯宗の時「彫_二五千軸之秘藏_一」し、

(26)『大日本仏教全書』一一五、名著普及会

(27)『高麗史』卷二、太祖二十六年（九四三）四月条

(28)今西竜「高麗太祖訓要十条に就きて」、『高麗史研究』

文宗の時に「鏤_レ 千万頌之契經_一」した。

②、『高麗史』巻二十四、高宗三十八年（一二五一）九月、壬午条に、

顯宗時板本、燬_レ 於壬辰蒙兵_一。

とあって、壬辰年（一二三二）侵入の蒙古兵によって焼失した大藏經板本は、顯宗時に彫刻された板本であった。

③ 李奎報『大藏刻板君臣祈告文』（以下、『祈告文』）に、

甚矣達旦（蒙古）之為_レ 患也。……由_レ 是、凡所_一 經由、無_一 仏像梵書。悉焚_一 滅之。於_レ 是、符仁寺之所_一 藏大藏經之板本、亦掃_レ 之無_レ 遺。嗚呼、積年之功、一旦成_レ 灰。國之大宝喪失矣。

とあるように、焼失した大藏經は「符仁寺」（大邱市）にあった。

④ また、『祈告文』には、

則昔顯宗二年（一〇一一）、契丹主大挙_レ 兵來征。顯祖南行避_レ 難。丹兵猶屯_一 松岳城_一 不_レ 退。於_レ 是乃與_一 群臣_一 發_一 無上大願_一、誓刻_一 成大藏經板本_一。然後、丹兵自退。然則大藏一也。

とあって、顯宗二年時に大藏經彫刻の発願をたてた。彫刻発願は、仏力によって、契丹軍侵入の国難の打開を意図したものであった。そして、契丹軍の撤退が、大藏經彫刻によるものと認識された。

顯宗元年（一〇一〇）十一月十六日、四十万の契丹軍が鴨緑江を渡って侵入してきた。翌年の正月元旦には、「契丹主入_一 京城_一。焚_一 焼大廟・宮闕_一、民屋皆盡_一」したが、二十九日撤退した。⁽²⁹⁾契丹はその後、侵入をくりかえし、顯宗九年（一〇一八）十二月十万の兵で侵入、翌年の二月一日、龜州にて姜邯贊將軍等は「激戦

大_一 敗之_一」った。結果、契丹は五月と八月に使臣をよこし、高麗も八月使臣を派遣して国交問題を討議、顯宗十一年（一〇二〇）三月、国交が回復している。

ここで、大藏經「初彫」についての研究史を概略しておこう。

A 顯宗二年説

○ 村上龍佑

「大藏經版彫造年代考」で、『諸宗教藏彫印疏』と『祈告文』の記事を根拠に、顯宗二年説を主張した。

B 顯宗～文宗説

○ 妻木直良

「三たび高麗大藏經雕造を論ず」で、『諸宗教藏彫印疏』の記事にもとづき、「顯宗が発願して、文宗が大成した」とし、顯宗・文宗の「父子相繼で一大藏を完成したと見る方が穩当」とした。そして、「文宗の即位第十二年頃には、既然大藏完成の事業が成就」したとする。

○ 小野玄妙

「高麗祐世僧統義天の大藏經雕造の事蹟」で、『諸宗教藏彫印疏』と『祈告文』の記事をもとに、「朝鮮最初の大藏經板が顯宗の朝に刻成」したものとし、その後、妻木直良との論争を経て、昭和四年の「高麗顯宗及文宗開版の古雕大藏經」⁽³⁰⁾において、『諸宗教藏彫印疏』を根拠に、顯宗～文宗説を主張した。

C 顯宗十一・二年～宣宗四年説

○ 池内宏

① 『玄化寺碑陰記』に、

以_レ 昨（顯宗十年）……。加又、特命_一 工

(29)『高麗史』巻九十五、黃周亮伝に、「契丹兵陷_一 京城_一 焼_一 宮闕書籍_一 盡為_一 煨燼_一」とある。

(30)前掲書『仏教の美術と歴史』下

人、彫、造大般若經六百卷、並三本華嚴經、
金光明經、妙法蓮華經等印板。

とある記事をもって、契丹と和議が成立した顯宗十一年（一〇二〇）か、翌年の大藏經の「一小部分を開板」説を主張。⁽³¹⁾そして、

② 『浮石寺円融国師碑』に、

癸巳（文宗七年）……。以前、印、写大藏經一部、芸、蔵于安国寺。

とあって、「印本が写本と合せて一藏をなしたる如」きは、「当時雕板の業のなほ半ば」にあるためとし、

③ 『高麗史』卷十、宣宗四年に、

○ 二月甲午、幸、開国寺、慶、成大藏經。

○ 三月己未、王如、興王寺、慶、成大藏經。

○ 四月庚子、幸、帰法寺、慶、成大藏經。

とある記事は、「正藏全体の刻成を意味」するものとし、宣宗四年（一〇八七）完成説を主張した。

さて、この池内説にたてば、完成まで六十七・八年を要したことになる。「北宗版」が完成に要した期間は、開宝四年～太平興国八年（九七一～八三）の十三年間であった。なによりも、蒙古侵略の国難を仏力での打開を意図した海印寺大藏經の彫刻でさえ、高宗二十三年～三十八年（一二三六～五一）の十六年間であった。これと較べて、「当然、長年月を費やして成るべき大藏經板雕造の事業」としても、あまりにも長年月すぎる。

また、『祈告文』を顯宗二年より「二百二十六年の後なるが故」に、「妄りに之を信用すべきにあらず」とし、「経板の刻成を契丹侵入の際にありとなせるは、頗る不可解なる所伝」と

するが、この論の展開はあまりにも主観的すぎて、論争は水掛け論になってしまう。

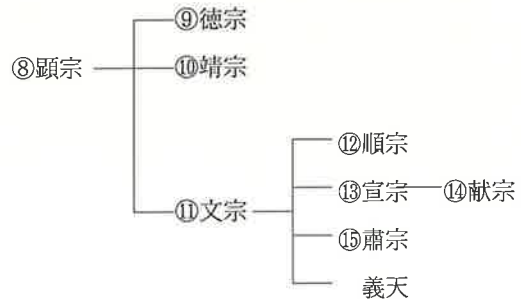
初彫大藏經の完成は、『祈告文』の顯宗二年発願説を認め、終了年不明のまま、顯宗～文宗の親子二代の完成とするのが、素直であろう。

(2) 義天の統藏経版の刊行

『高麗史』卷九十、大覚国師伝に、

又、於、興王寺、奏置、教蔵都監。講、書於遼宋、多至、四千卷。悉皆刊行。

とある。興王寺に教蔵都監を置き、大覚国師・義天が遼・宋で蒐集した四千卷を、すべて開板したという。



義天は、文宗の第四子として、文宗九年（一〇五五）九月に生れ、肅宗六年（一一〇一）十月に入寂した。諡を大覚国師という。教蔵を彫刻した興王寺は、父・文宗が、十年～二十一年（一〇五六～六七）の十二年をかけて建てた寺であった。『興王寺大覚国師墓誌』⁽³²⁾に、

宣宗、以、文考創成興王寺、従来、無、主掌、詔、国師、為、住持、而演講。

とあるように、義天は、兄・宣宗の命で、興王寺の住持になっている。これは、興王寺での經典四千卷の開板、と関連した処置であった。こ

(31)前掲書『朝鮮金石總覧』上、八二

(32)前掲書『朝鮮金石總覧』上、九〇

の四千巻の開板は、父・文宗が完成させた大藏經板の彫刻に続くもので、これを「統藏經」といっている。『靈通寺大覚国師碑⁽³³⁾』に、

又於_レ 辛未春_一、南遊搜索、所_レ 得書無慮四千卷。……請置_一 教藏司於興王寺_一。

とあって、教藏都監の設置は、辛未年（一〇九一）の春以降であり、これから、「統藏經」の開板も一〇九一年以降になる。

義天は、十九才のとき、教藏収集の発願をしたが、これは、宣宗七年（一〇九〇）編の『新編諸宗教藏總録』序（『大覚国師文集』巻一）に、

予嘗^{ひそかに} 竊_レ 謂、經論雖_レ 備、而章疏或廢。則流行无_レ 由矣。輒、效_一 昇公護法之志_一、搜_一 訪教迹_一、以、為_一 己任_一。孜孜不_レ 捨、僅二_一 十載于茲_一 矣。

とあるように、『開元釈教録』の編者・智昇の意志にならい、經論の章疏つまり、經典の注釈書の蒐集を自己の任務と課して、搜訪に二十年を費やしている。つづいて、開板の意図について、

今以_一 所_レ 得新旧製撰諸宗義章_一、不_一 敢私秘_一、叙而出_レ 之。後有_レ 所_レ 獲、亦、欲_一 隨而錄_一 之。脱或将来、編_一 次函帙_一。與_一 三藏正文_一、垂_一 之无窮_一、則吾願畢矣。

と、蒐集した章疏を秘密にせず、三藏の正文を函帙に編次、つまり、開板して無窮に垂れんとすることが願いだ、としている。

章疏蒐集のため、宣宗二年（一〇八五）五月に入宋し、翌年の五月末に帰国している。また、『大覚国師文集』巻十四に、「寄_一 日本国諸法

師_一 求_一 集教藏疏_一」があり、日本からも蒐集している。宣宗七年（一〇九〇）、目録『新編諸宗教藏總録⁽³⁴⁾』三巻を編纂した。蒐集の教藏総数は次の通りであった。

經疏	五六一部	二五八六卷
律疏	一四二部	四六七卷
論疏并集	三〇七部	一六八七卷
合計	一〇一〇部	四七四〇卷

この目録にあげられた八割は現存しないという。現存するものに、奈良・東大寺図書館蔵の『大方廣仏花沘經隨疏演義鈔⁽³⁵⁾』奥付に、

大安十年（一〇九四）甲戌歳、高麗国大興王寺奉_一 宣雕造_一。

とあり、卷二十下の奥書の年号は丁丑歳で「寿昌三年」（一〇九七）となっている。大安と寿昌の年号は、契丹の年号である。また、名古屋真福寺蔵の『釈摩訶衍論通玄鈔⁽³⁷⁾』の識語の年号は、寿昌五年（一〇九九）となっており、

正二位權中納言兼太宰帥・藤原朝臣季仲、依_一 仁和寺_一 禪定二品親王仰_一、遣_一 使高麗国_一 請来。即長治二年乙酉五月仲旬、從_一 太宰府_一 差_一 專使_一、奉_一 請_一 之。

とあって、京都仁和寺の禪定二品親王（白河天皇第三子・覚行法親王）は、印刷してまだ六年後の長治二年（一一〇五）、『釈摩訶衍論通玄鈔』を入手している。

大正十一年（一九二二）七月、朝鮮総督府学務局編輯課長兼古蹟調査課長・小田省吾は、全羅南道順天郡松光面外松里の松広寺で、『大般涅槃經疏』巻第九・第十の合本一冊を発見し⁽³⁸⁾

(33)前掲書、村上龍佑『大藏經板雕造年代考』

(34)前掲書『大正新脩大藏經』第五十五卷

(35)妻木直良「東大寺に於ける高麗古版經に就て」、『考古学雑誌』第一巻、第八号、明治四十四年四月

(36)池内宏「高麗朝の大藏經」

(37)妻木直良「契丹に於ける大藏經彫造の事実を論ず」、『東洋学報』第二巻、第三号、大正元年九月。（覆刻『東洋学報』第二巻、財団法人 東洋文庫、昭和四十二年十月）

た。各巻の奥書に「海東伝教沙門 義天 校勘」とあり、年号が寿昌五年となっている。北涼の曇無讖訳『大般涅槃經』⁽³⁹⁾（四十巻本）の注釈で、注釈者は、唐の大薦福寺の沙門・法宝である。この書は、中国や日本にもない、唯一現存の零本である。

大覚国師・義天の「統蔵雕」の事業は、興王寺に教蔵都監が置かれた宣宗八年（一〇九一）より、没年の肅宗六年（一一〇一）にかけて遂行された。享年、若干四十七才であった。

(3) 大藏經版の再彫とその意義

『高麗史』巻二十四、高宗三十八年（一二五一）九月壬午条に、

幸_レ 城西門外大藏經板堂_一。率_レ 百官_一 行_レ 香。顯宗時板本燬_レ 於壬辰蒙兵_一。王與_レ 群臣_一 更願_レ 立都監_一。十六年而功畢。

とあるように、顯宗～文宗時に彫刻され、符仁寺（大邱市）に移送されていた大藏經板は、壬辰年（一二三二）の秋、蒙古の第二次の侵略時に灰になった。蒙古の暴虐さについて、『祈告文』は、

達丹之為_レ 患也。其残忍凶暴之性、已不_レ 可_レ 勝_レ 言矣。至_レ 於癡暗昏昧_一 也。又、甚_レ 於禽獸_一。

と表現した。また、蒙古軍の通過するところ、「無_レ 仏像梵書_一、悉焚_レ 滅之_一」された。

高麗政府は六月、首都を江華島に移し、「江都」と称した。高宗二十三年（一二三六）、蒙古折伏を祈願して、大藏經板の再彫刻を開始、十六年目の高宗三十八年（一二五一）に完成し、

城西門外の「大藏經板堂」に納められた。現在では、海印寺（慶尚南道）が所蔵する。經板数は、八万二千二百四十枚（重複の百二十一枚を含む）、欠板は十八枚。入蔵經典は、『高麗国新雕大藏校正別録』三十巻と『大藏目錄』三巻を含め、千五百十四部、七千五百二十巻に達する。『高麗大藏經』が「世界的至宝」として評価されるが、それは『高麗国新雕大藏校正別録』⁽⁴⁰⁾（以下、『校正別録』）三十巻の存在を抜きにして語れない。『校正別録』の各巻首ごとに「沙門守基等、奉_レ 勅校勘」とある校勘者・沙門守基は、大藏經編纂の基本として、国本（初彫本）、宗朝大藏經を含めた北宋版、契丹本を厳密に比較校合する方法論を取った。増補脱落ある場合、文脈断絶し意味不明な場合、他の大藏經の正文を以って補正した。重複の場合、異名同一の場合、相互関係を明らかにして、取捨には逐一その理由を明記した。この方法論と厳密性によって、高麗大藏經の学術的価値を不動のものにしている。また、『校正別録』の存在によって始めて、現存しない初彫本、北宋版、契丹本のそれぞれの輪郭を知ることができる。

北宋ではその後、東禪寺本、開元寺本、思溪版、磧砂版等が、南宋時代に普寧寺版、弘法寺版が、元代には世宗の時代（一二七七～九〇）の元版、明代に四回が出版されている。常磐大定氏の「大藏經雕印考」⁽⁴¹⁾は、

- ① 思溪本・元本・明本がなく、高麗本だけにある經典
- ② 思溪本・元本がなく、高麗本だけにある經典

(38)池内宏「新たに発見せられた涅槃經の疏」、『東洋学報』第十二巻、第四号、大正十一年十二月。（覆刻『東洋学報』第十二巻、財団法人 東洋文庫、昭和四十三年四月）

(39)前掲書『大正新脩大藏經』第十二巻

(40)大日本校訂『縮刷大藏經』結字帙九冊・十冊、京都 弘教書院、明治十三～七年

(41)『哲学雑誌』第二十八巻、第三百二十二号、大正二年十二月

③ 思溪本・元本にあって、高麗本にはない
經典

④ 宋本・元本にあって、高麗本にはない經
典

の四つの場合に分類してその經典をあげ、「学者の注目を惹くべき幾多の長處を含む中、殊に喜ぶべきは、……独り麗本にのみ現存する多数の經典あること、是なり」とし、もっとも新しい「明本以上たるは、豈一大長處にあらずや」といっている。また、「西暦九七〇年以前のものにて、麗本に欠けたるは、極めて僅少の巻数のみ」というまでもなく、高麗大藏經は、仏教經典の貴重な「宝庫」としてもまた、世界遺産なのである。

第三章 海印寺への移送、通説への疑問

高宗二十三年～三十八年（一二三六～五一）の十六年間をかけて完成し、江華島の「大藏經板堂」に納められた大藏經版は、現在、慶尚南道陝川郡伽倻山・海印寺が所蔵する。海印寺への移送についての通説⁽⁴²⁾は、次の『李朝実録』の二つの史料に依拠する。

① 『太祖実録』卷十四、太祖七年五月条に、
丙辰、幸_二 龍山江_一。大藏經板輸_レ 自_二 江華禪源寺_一。戊午、雨。令_二 隊長隊副二千人_一 輸_二 經板于支天寺_一。

とあり、太祖七年（一三九八）五月に、江華禪源寺より支天寺（漢城＝現ソウル）へ移されている。したがって、海印寺への移送は、一三九八年五月以降とし、

② 『定宗実録』卷一、定宗元年正月条に、
命_二 慶尚道監司_一、飯_二 印經僧徒于海印寺_一。
太上王欲_二 以_二 私財_一 印_二 成大藏經_一。

(42) 「海印寺高麗大藏經板ノ由來」、前掲書『高麗板大藏經印刷顛末』。池内宏、前掲書「高麗朝の大藏經」。

とあるように、太上王（太祖）が定宗元年（一三九九）正月に、海印寺で大藏經を印刷させており、これにより、海印寺への移送を一三九九年正月より以前か、正月中とする。

海印寺への移送問題で基本は、倭寇の襲撃から大藏經板を守るために、提起された問題である、ということである。倭寇については、『高麗史』卷二十二、高宗十年（一二二三）五月甲子条に、「倭、寇_二 金州_一」とする侵入記事があり、また、高宗十三年（一二二六）正月癸未条にも、「倭、寇_二 慶尚道海州郡巨濟縣_一」とあるように、一二二〇年代に入って、日本の海賊が出没するようになった。この時期、「倭寇」の語は、「倭」が主語で「寇」が動詞であって、概念化した固有名詞ではなかった。

さて、『高麗史』卷二十二、高宗十四年（一二二七）九月庚辰条に、

監_二 修国史_一。平章事・崔甫淳、修撰官・
金良鏡、任景肅、兪弁旦等、撰_二 明宗実録_一、
藏_二 於史館_一。又以_二 一本_一 藏_二 於海印寺_一。

とあって、一二二七年九月、国史『明宗実録』を編纂し、一本を海印寺に収蔵している。⁽⁴³⁾ 權近（一三六三～一四〇九）の「送_二 裴中員修_一 撰_二 曠史_一 七長寺_一序」（以下、「七長寺序」）に、

歷代之史亦可_二 以_二 觀_一 世變_一 矣。本朝有_二 海東數百年_一、初藏_二 国史于伽耶之海印_一。蓋慮_二 後世遭_二 乱而遂失_一 也。伽耶在_二 国最遠而險。海印在_二 伽耶_一 最僻而深阻。故、国家雖_レ 有_レ 變未_レ 嘗及_二 焉_一。祖宗之慮遠矣。此者制_二 倭失_二 律、深寇_二 州縣_一。伽耶幾不_レ 守。

とあって、収蔵場所に海印寺を選んだ理由は、「後世遭_二 乱而遂失_一」することを恐れたこと。また、海印寺が「最遠而險」にして、「最僻而

吉川弘文館版『国史大辞典』の「高麗板大藏經」の項

(43) 『東文選』卷之九十、学習院東洋文化研究所

深阻」の地であることによる、とした。

ところが、海印寺収蔵の国史は、倭寇の難を避けるため、一三七九年以降各地を転々としている。「七長寺序」に、

洪武己未（一三七九）秋、輸_レ其史于善之得益_一。辛酉（一三八一）秋、踰_レ嶺而北。又、輸_レ于忠之開天_一。今癸亥（一三八三）夏、賊又逼_レ忠之旁縣_一。七月又自_レ開天_一移_レ于竹之七長寺_一。

とあるように、各地を転々としている。

海 印 寺

↓ 一三七九年 秋

善州得益寺

↓ 一三八一年 秋

忠清開天寺

↓ 一三八三年 七月

竹州七長寺

また、『高麗史』卷四十五、恭讓王二年（一三九〇）十二月条に、

移_レ国史于忠州_一。先_レ是、藏_レ於竹州七丈寺_一。今夏倭賊入侵。故、移_レ之。

とあるように、一三九〇年の夏、「倭賊入侵」のため、国史はさらに竹州七長寺から忠州に移されている。「七長寺序」の作者、権近は、

地之險遠不_レ足_レ恃。而、賊之敢深入、乃若_レ此。嗚呼、可_レ以觀_レ世變_一矣。

と慨嘆している。海印寺は「地之險遠不_レ足_レ恃」と認識されていた。

一三九二年七月に成立したばかりの李氏朝鮮は、日本に使者を送っている。それは、明德三

年（一三九二）十二月廿七日付の「答_一朝鮮_一書」に、「以_一海寇未_レ息、兩國生_レ釁_一」とあるように、倭寇の取り締まり要請が目的であった。一三九七年十二月、大内義弘の使者に対する「回礼使」として、朴惇⁽⁴⁴⁾之を日本に派遣したが、「復_一義弘_一書」⁽⁴⁵⁾に、「大相国（足利義満）禁賊之事」とか、「謀_一議於大相国_一。禁_一制兇徒_一以篤_一隣好_一」とあって、倭寇対策は緊急の課題となっていた。『明宗実録』が、海印寺から安全を求めて転々としなければならなかった時代に、「地之險遠不_レ足_レ恃」とされた海印寺への移送は、「到底、想像し難し」⁽⁴⁶⁾というべきで、信じ難い。

一三五〇年以降、倭寇の本格的な侵入がはじまった。『高麗史』卷三十七、忠定王二年（一三五〇）二月条に、

二月倭_一寇固城・竹林・巨濟_一。……倭寇之侵、始_レ此。

とある。ところで、李穡⁽⁴⁷⁾（一三二八～九六）は、本貫が韓山で、号を牧隱というが、一三七八年作の「砥平縣彌智山龍門寺大藏殿記」に、

……自_一庚寅歲（一三五〇）_一、倭人犯_一浜海郡邑_一。而江華當_一要衝_一、尤被_一其害_一。

とあって、一三五〇年以降、江華島においても、倭寇による被害をうけており、また、

宰臣吳子淳室謀曰、吾大父婦_一依大法_一而施_一大藏_一。不幸為_レ賊所_レ躪亡失者幾半。蓋補_一正之_一。

とあるように、吳子淳夫人の父の大藏経も、倭賊によって、「亡失者幾半」という状態であった。このように、江華島の大藏経版にとっても、

(44)『善隣国宝記』上、『統群書類従』第三十輯上、統群書類従完成会

(45)『太祖実録』卷第十二、六年十二月癸卯条

(46)菅野銀八「海印寺大藏経版に就て」、『史林』第七卷、

第三号、京都大学文学部

(47)『東文選』卷之七十四。韓国名著大全集『牧隱集』、大洋書籍、ソウル

亡失の危機にあり、安全な場所への移送の必要性は、一三五〇年以降から提起された問題であって、李氏朝鮮の時代になって、はじめて提起された問題ではない。

それでは、江華島「大藏經板堂」から海印寺に移された時期はいつか。李崇仁^{リソンイン}（一三四七～九二）の『陶隱集』⁽⁴⁸⁾ 卷之三の絶句二首の詞書に、「睡菴文長老、印藏經于海印寺戲呈」とある。この詞書の通りであれば、この史料は、李崇仁の死去年からみて、通説と違って、一三九二年以前にはすでに、海印寺に大藏經版が存在していた事実を示し、通説を否定する重要な史料となる。この「藏經」について、池内氏は、「一切經にはあらず」とし、「若干の經卷をかく称せりとも解せられざるにあらず」として、否定する。このことをもう少し見てみよう。

牧隱・李穡の大藏經印成に関する二つの史料がある。①『陶隱集』卷之四、「驪興郡神勒寺大藏閣記」（以下、「神勒寺大藏閣記」）に、

判三司事、韓山牧隱先生、命崇仁曰、……至辛酉（一三八一）四月、印出經律論。……壬戌（一三八二）正月、於華嚴靈通寺轉閱。四月舟載、至于驪興之神勒寺、懶翁示寂之地也。

とあって、李穡は「先君之願」実現のため、一三八一年、「經律論」を印刷し、神勒寺に収めている。

②『高麗史』卷百十五、「李穡伝」に、

辛禍三年（一三七七）。……穡、追父穀志成^成大藏經。

とあって、一三七七年、「父穀志」を追慕して大藏經を印成した。この二つの記事は、同じ事由を述べたものである。

牧隱・李穡が成均館大司成のとき、李崇仁を学官に登用しており、李穡と李崇仁は師弟関係にあった。したがって、李崇仁の『陶隱集』の一三八一年説の方が、『高麗史』の記事より信頼性がある。さきの「睡菴文長老、印藏經于海印寺戲呈」の「睡菴文長老」は、牧隱・李穡⁽⁴⁹⁾のものとされ、そうであれば、一三八一年の「經律論」の三藏は、大藏經のことであるから、大藏經の印刷は、海印寺で行なわれたことになる。

以上のことから、高麗政府は、国史『明宗実録』の場合のように、大藏經版を倭寇の侵入による「亡失」を避けるため、倭寇の侵入が本格化した一三五〇年からまもなく、「最遠而險」にして「最僻而深阻」の地、海印寺への移送を講じた、として間違いなからう。この場合、太祖七年五月条の「大藏經板輸自江華禪源寺。……輸經板于支天寺」の解釈が問題で、支天寺に移送した大藏經は、世宗五年（一四二三）に足利義持が請来した「梵字密教大藏經」⁽⁵⁰⁾であろうとする考えもあるが、これを含めて、大藏經版の海印寺への移送問題は、通説を再検討する必要があるのは事実である。

(48) 韓国名著大全集『陶隱集・治隱集・陶隱集』、ソウル
(49) 前掲書、高橋亨「高麗大藏經板印出顛末」

(50) 高橋亨「高麗大藏經板印出顛末」